

古代・中世・近世の日向における火打石 ～基礎資料の報告（１）～

藤木 聡

（宮崎県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

火は、人の暮らしにおいて不可欠なものであり、マッチが登場する前までは、火を得る方法として打撃式発火法と摩擦式発火法の２つがみられた。打撃式発火法は、火打石と鉄製の火打金を打ち付けて火花を発生し、火口¹⁾に火花を落として火種を得るものであり、それらの研究をとおして人と火の関係史を紐解くことが可能となってくる。

たとえば九州地方では、火打石・火打金を用いた打撃式発火法が遅くとも８世紀には採用されていることや、古代から近代までの火打石の石材が地域ごとに時期別に変化すること、近世には広域流通品と在地産火打石がともに用いられること、火打金の変遷の総体等について明らかとなっている²⁾（藤木 2020a・2020b ほか）。このうち、宮崎県域においては、中世以降の火打金 20 点・民具資料 4 点によって、火打金の型式的な変遷や考古資料と民具資料の連続性が明らかとなり（藤木 2017）、15 年前の集成では 2 点のみであった火打石も、2020 年度末には 284 点の出土が知られるまでに増加した。宮崎県域における火打石出土例の増加は、考古資料としての火打石への認識が深まったことによる大きな成果である。

しかし、この 284 点の内訳を見ると、特定の遺跡や地域へ集中していることや年代の絞り込める遺構出土品が少ないこと等により、宮崎県域における火打石の石材やその変遷、消費・流通の状況等を知る上では、未だ資料の不足や偏りがあると言わざるを得ない。この現状の解消に向けて、新資料の出土を待つとともに、すぐに着手できるのが、各地の収蔵庫に赴いて膨大なコンテナ群を悉皆的に検索し、発掘調査報告書に未掲載のままとなっている資料を“再発掘”していくことである。本稿は、その途中経過として宮崎県内の遺跡出土火打石 61 点を新たに報告し、今後の研究の基礎資料とするものである。

火打石は、その獲得から廃棄までのライフサイクルの視点から、採集・購入されて使用に至る前の“未使用の火打石”、使用過程にある“火打石”、使用による打ち欠けや鋭い稜線の再生により生じた“火打石の欠片”の３つに分類される（図 1）。以下の報告では、個々の資料を分類の上で法量や石材、消費・使用状況等の所見を述べるとともに、資料に付された注記やラベル書き等から出土状況を復元し、出土遺構や包含層の位置づけでもって火打石の年代を推していく。

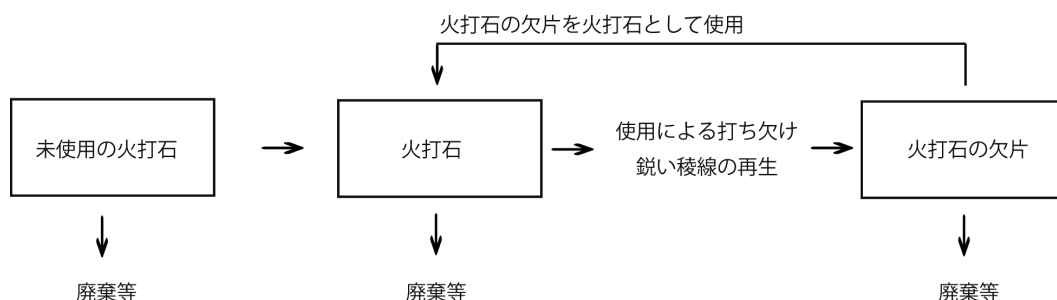


図 1 ライフサイクルからみた火打石の分類

- 本稿で火打石が新たに資料化された遺跡
- これまでに知られている火打石出土遺跡
- △ 【参考】 民俗資料としての火打石が収集された地点

※ 地図中の1～97・A～Dは右下の遺跡一覧表と対応する

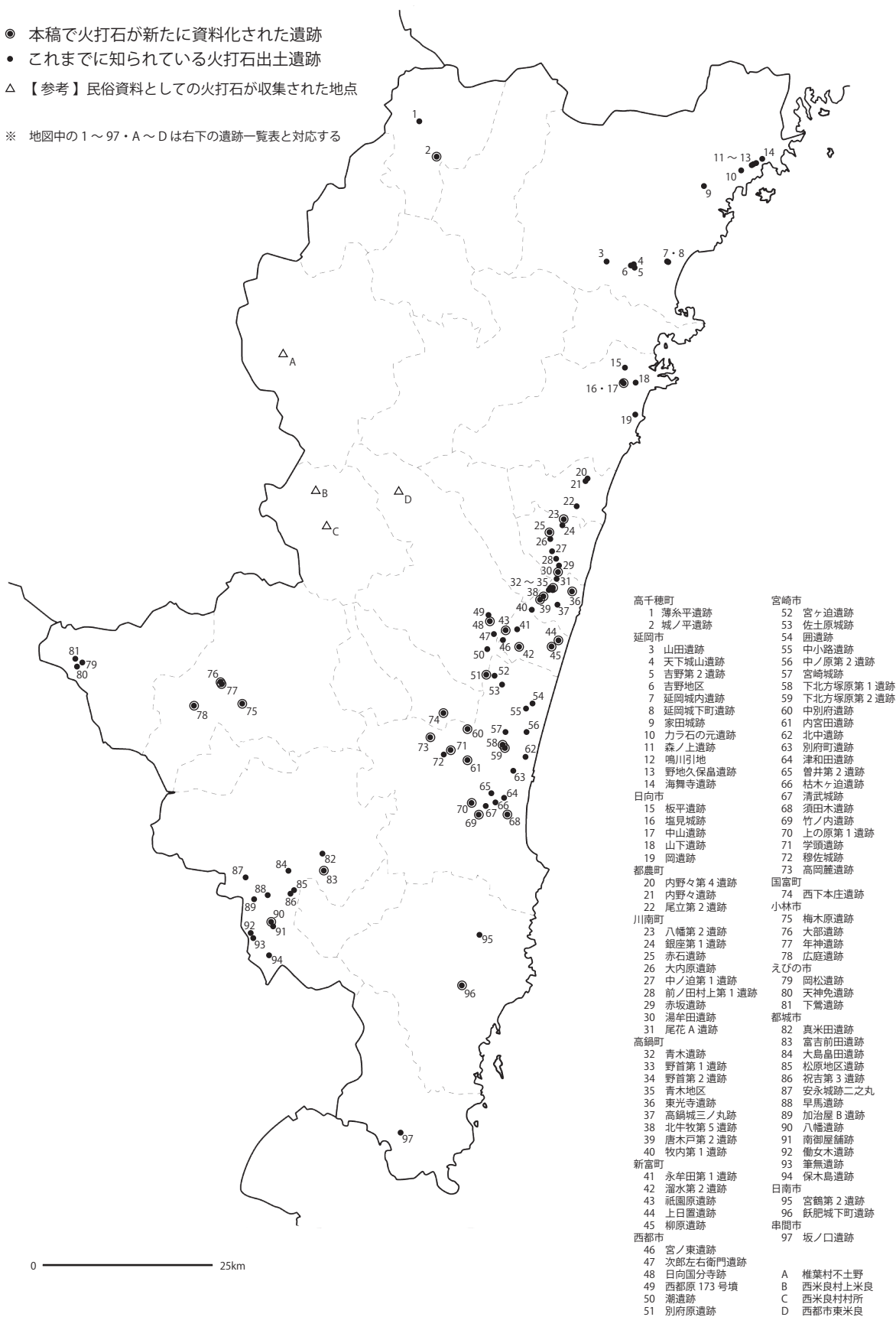


図2 火打石の出土した宮崎県域の遺跡分布図

2 資料報告

今回取り上げる火打石等 61 点は以下の①から⑤のとおりであり、いずれも詳細報告は今回が初出となる。図 3～5 で実測図を、図版 1・2 でカラー写真を示し、1～61 の番号は図・図版間で対応させている。遺跡の位置は図 2 に示した。

- ① 宮崎県文化課及び宮崎県埋蔵文化財センターが 2009 年までに刊行した発掘調査報告書所収の遺跡分で未掲載の火打石等 28 点

遺跡名（所在地）：城ノ平遺跡（高千穂町）、中山遺跡（日向市）、日向国分寺跡（西都市）、別府原遺跡（〃）、湯牟田遺跡（第一次）（川南町）、八幡第 2 遺跡（〃）、北牛牧第 5 遺跡（高鍋町）、唐木戸第 2 遺跡（〃）、柳原遺跡（新富町）、祇園原遺跡（〃）、内宮田遺跡（宮崎市）、中別府遺跡（〃）、学頭遺跡（〃）、高岡麓遺跡（〃）、上の原第 1 遺跡（〃）、竹ノ内遺跡（〃）、西下本庄遺跡（国富町）、八幡遺跡（都城市）

- ② 宮崎県埋蔵文化財センターが 2010～2020 年までに刊行した発掘調査報告書の本文中で、出土があった旨の記載や写真掲載までされたものの法量等が不明であった火打石等 11 点

遺跡名（所在地）：赤石遺跡（川南町）、東光寺遺跡（高鍋町）、青木遺跡（〃）、富吉前田遺跡（都城市）、飫肥城下町遺跡（日南市）

- ③ 小林市教育委員会が所蔵している資料中の火打石等 8 点

遺跡名：梅木原遺跡・年神遺跡・大部遺跡・広庭遺跡（全て小林市内に所在する遺跡）

- ④ 新富町教育委員会が所蔵している資料中の火打石等 3 点

遺跡名：溜水第 2 遺跡・上日置遺跡・（新富町内）（全て新富町内に所在する遺跡）

- ⑤ 宮崎市教育委員会が所蔵している資料中の火打石等 11 点

遺跡名：下北方塚原第 1 遺跡・下北方塚原第 2 遺跡・須田木遺跡・高岡麓遺跡（全て宮崎市内に所在する遺跡）

①については、発掘調査報告書の発行年の古い方から順に紹介する（図 3-1～21・図 4-22～28）。日向国分寺跡（図 2-48）では、宮崎県教育委員会による 1989 年度の試掘調査（宮崎県教育委員会 1991）トレンチ 5 のⅠ～Ⅱ層より 1 点（図 3-1）、同じくトレンチ 5 のⅡ～Ⅲ層より 1 点（図 3-2）の計 2 点の火打石が確認された。図 3-1 は、石英の小さな円礫が打ち割られ、その礫面と剥離面がなす稜線に潰れがあるので、法量 $2.5 \times 2.2 \times 1.5\text{cm}$ ・重量 7.8 g である。図 3-2 は淡灰色に茶黒色の節理が入るチャート製で、法量 $1.6 \times 1.3 \times 0.8\text{cm}$ ・重量 1.1 g である。1989 年度調査トレンチ 5 周辺では、西都市教育委員会により 2001 年度の第 7 次調査が追加され、中心伽藍北東側の寺域内にあたること、2 時期にわたる掘立柱建物跡の存在等が確認されている（西都市教育委員会 2009）。火打石 2 点の年代について、国分寺跡に伴うものなのか注目されるものの、トレンチ 5 が遺構分布の稀薄な箇所にあたることや、2001 年度調査で近世の溝等も確認されたことから、その絞り込みは難しい。城ノ平遺跡（図 2-2）では、A 区包含層から火打石 1 点の確認された（図 3-3）。火打石は淡いピンク色を帯びた粗質の石英製で、法量 $3.5 \times 3.5 \times 2.6\text{cm}$ ・重量 27.5 g である。同遺跡 A 区では縄文時代後期・晩期を中心とする包含層が調査され（宮崎県教育委員会 1993）、未掲載資料中に、火打石とともに方孔を中央にもつ銅銭（銭種不明）1 点も確認された。火打石の年代の絞り込みは難しいものの、銅銭と関連付けるならば中世～近世等であろうか。柳原遺跡（図 2-45）では、火打石 2 点の確認された（図 3-4・5）。図 3-4 は、近隣で採集される石材ではない半透明オレンジ色のメノウ製で、法量 $2.1 \times 1.6 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 3.3 g である。



図版1 火打石(宮崎県埋蔵文化財センター所蔵)



図版2 火打石（宮崎県埋蔵文化財センター、小林市・新富町・宮崎市教育委員会所蔵）

図3-5は灰白色チャート製で、法量 $1.6 \times 2.2 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 10.7g である。同遺跡Ⅱ区では中世～近世の陶磁器・銅銭等が出土しており（宮崎県教育委員会1994）、火打石もそれらに関係するものか。**学頭遺跡**（図2-71）では、3次調査東区の柱穴P28から1点（図3-6）、5次調査1区から1点（図3-7）の計2点の火打石が確認された。図3-6は大田井産チャート製で³⁾、法量 $1.7 \times 1.4 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 2.2g である。図3-7はヒスイのような色合いを合わせ持つ乳白色チャート製で、法量 $3.6 \times 1.5 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 4.7g である。同遺跡では、縄文時代から古墳時代の多くの遺物がある一方で、遺構の大半は近世以降のものと報告されている（宮崎県教育委員会1995）。**高岡麓遺跡**（図2-73）では、10号土坑から火打石1点が確認された（図3-8）。火打石は白色不透明の珪質岩製で、法量 $1.7 \times 2.7 \times 1.7\text{cm}$ ・重量 9.4g である。10号土坑の埋土中からは陶磁器・瓦・瓦塔・瓦堂片・フイゴ羽口・鉄滓・獣骨等が出土し、陶磁器には、17世紀代のものも含まれるが、多くは18世紀後半～19世紀代の広東碗・端反碗・蛇ノ目釉剥ぎの碗等である（宮崎県教育委員会1996）。火打石もまた18世紀後半～19世紀代のものとみられる。**西下本庄遺跡**（図2-74）では、包含層中から火打石1点が確認された（図3-9）。火打石は黒い節理の走る灰緑色チャート製で、法量 $2.9 \times 2.3 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 7.5g である。同遺跡からは縄文時代～近世までの遺構・遺物が確認され（宮崎県埋蔵文化財センター1999）、現状で宮崎県最古となる12世紀中葉から末の火打金も出土している（藤木2017）。**上の原第1遺跡**（図2-70）では、2号溝から1点（図3-10）・4号溝から1点（図3-11）の計2点の火打石が出土した。図3-10は玉髓製で、法量 $2.2 \times 1.4 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 3.2g である。図3-11もまた玉髓製で、欠損著しく、法量 $1.8 \times 1.5 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 1.3g である。4号溝は近世末以降の比較的新しい時代の所産とされ（宮崎県埋蔵文化財センター2000a）、火打石の年代根拠とできる。**竹ノ内遺跡**（図2-69）では、A-Ⅱ区のグリッド一括取上げ資料中に火打石1点が確認された（図3-12）。火打石は玉髓製で、法量 $1.1 \times 1.5 \times 1.0\text{cm}$ ・重量 2.9g である。同遺跡では、A-Ⅱ区ほかにおいて中世～近世の遺構・遺物が確認されており（宮崎県埋蔵文化財センター2000b）、火打石もそれに関連するものであろう。**内宮田遺跡**（図2-61）では、表土中から火打石1点が確認された（図3-13）。火打石は、透光性のあるオレンジ色のメノウ製で、法量 $2.8 \times 1.1 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 0.6g である。表土中には縄文時代～近世の遺物が含まれている（宮崎県埋蔵文化財センター2001）。**中別府遺跡**（図2-60）では、Ⅱ層中から火打石の欠片1点が確認された（図3-14）。火打石の欠片は大田井産チャート製で、法量 $0.7 \times 1.1 \times 0.4\text{cm}$ ・重量 0.2g である。Ⅲ層が近世以降の耕作土であることから（宮崎県埋蔵文化財センター2001）、火打石もまた近世以降のものとみてよい。**別府原遺跡**（図2-51）では、A区の攪乱から火打石1点が確認された（図3-15）。火打石は玉髓製で、法量 $1.8 \times 1.5 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 4.3g である。同遺跡では、近世の道路状遺構2条や15～19世紀代までの陶磁器等が遺構内および攪乱から出土しており（宮崎県埋蔵文化財センター2002）、火打石もその年代幅の中で理解してよからう。**八幡遺跡**（図2-90）では、8号土坑から火打石の欠片1点（図3-16）、第一次調査の南北トレンチから火打石1点（図3-17）が出土した。図3-16は大田井産チャート製で、法量 $2.2 \times 1.2 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 2.2g である。図3-17はやや黄みがかった白色に赤紫・薄茶色の縞の入るメノウ製で、法量 $2.6 \times 2.9 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 14.4g である。八幡遺跡は、元和元年の一国一城令による都之城の破却後の領主館を取り巻く武家屋敷跡と比定され、18世紀後半～19世紀代の磁器染付碗・色絵碗・皿・瑠璃釉瓶等が出土した8号土坑は廃棄土坑と推定されている（宮崎県埋蔵文化財センター2003a）。大田井産チャート製火打石の欠片は、8号土坑の年代を根拠に、18世紀後半～19世紀代のものであろう。**祇園**

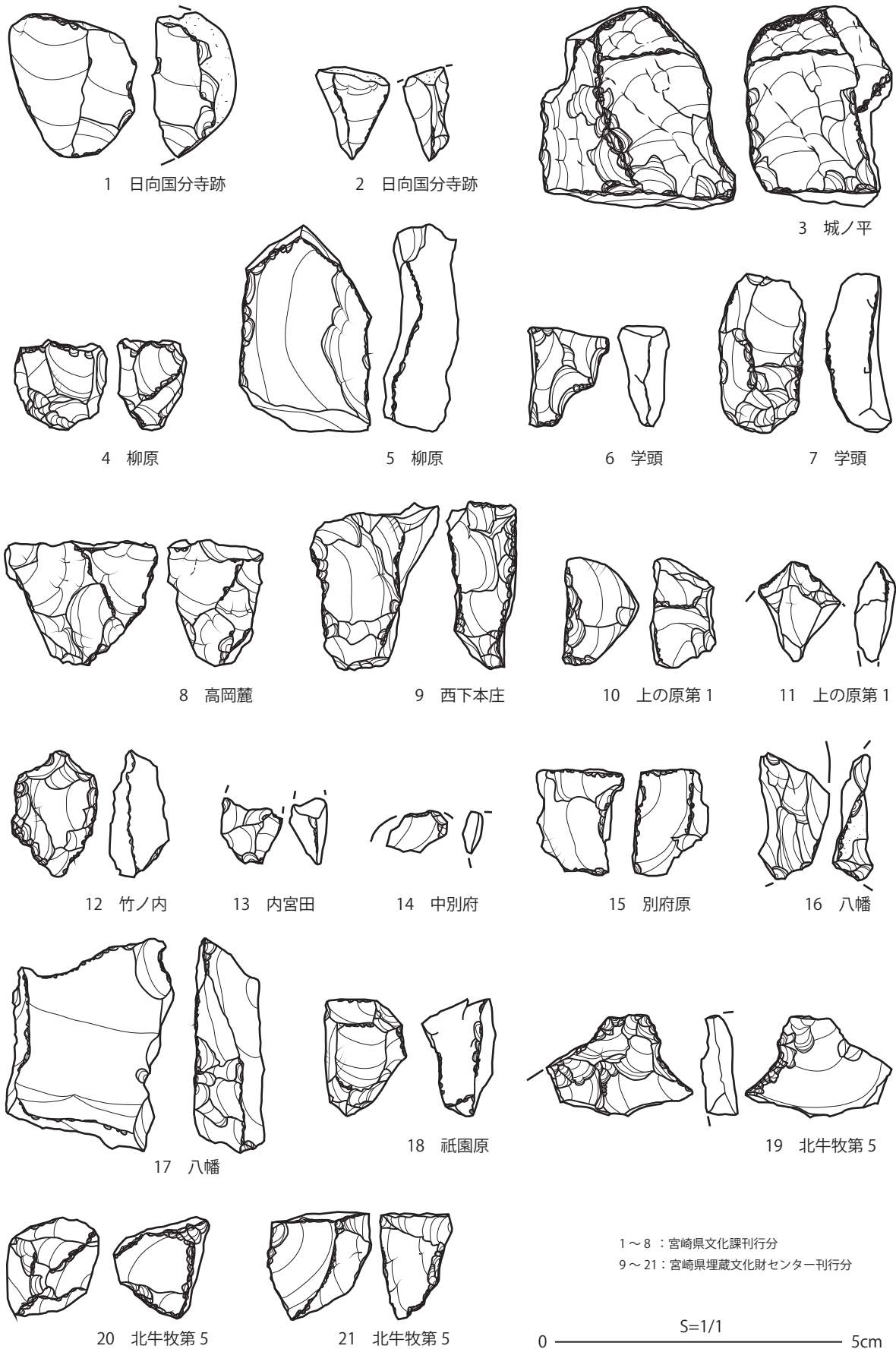


図3 火打石実測図（1）

原遺跡(図2-43)では、A区から火打石1点が確認された(図3-18)。火打石は玉髓製で、法量 $2.0 \times 1.4 \times 1.3\text{cm}$ ・重量3.9gである。A区では18～19世紀の陶磁器が出土しており(宮崎県埋蔵文化財センター2003b)、火打石もこれらに伴うものであろう。北牛牧第5遺跡(図2-38)では、報告書に掲載されたB区出土の“石核”2点について正しくは火打石であると後に修正されたが(藤木2004)、新たにB区I層から火打石2点(図3-20・21)・同攪乱から火打石の欠片を再利用した火打石1点(図3-19)・D区I層から火打石2点(図4-22・23)、火打石の欠片1点(図4-24)の計6点が確認された。図3-20が白色の珪質岩製であるほかは玉髓製であり、法量は、図3-19: $1.7 \times 2.6 \times 0.6\text{cm}$ ・重量2.3g、図3-20: $1.7 \times 1.6 \times 1.7\text{cm}$ ・重量4.0g、図3-21: $1.9 \times 1.8 \times 1.3\text{cm}$ ・重量4.0g、図4-22: $1.9 \times 1.7 \times 1.3\text{cm}$ ・重量4.0g、図4-23: $2.1 \times 2.4 \times 1.4\text{cm}$ ・重量9.2g、図4-24: $3.0 \times 1.7 \times 0.9\text{cm}$ ・重量2.8gである。図3-20・21、図4-23は二次的に火を受けたことで器面に無数のひびが生じており、特に図3-20はひびが顕著で一部が剥落している。同遺跡B・D区では、埋土からみて近現代のものと判断された溝状遺構や近世以降の陶磁器等が確認されており(宮崎県埋蔵文化財センター2003c)、火打石等もまたその年代のものとみてよからう。中山遺跡(図2-17)では、A区一括取上げ品中に火打石1点が確認された(図4-25)。火打石は白色チャート製で、法量 $2.7 \times 2.4 \times 1.7\text{cm}$ ・重量11.2gである。A区は17～19世紀末の墓域となっているほか、縄文時代等の遺物が若干出土している(宮崎県埋蔵文化財センター2004)。唐木戸第2遺跡(図2-39)では、H5グリッドの包含層中から火打石1点が確認された(図4-26)。火打石は玉髓製で、法量 $3.1 \times 2.6 \times 2.0\text{cm}$ ・重量14.3gである。H5グリッド周辺には12～13世紀代とされる掘立柱建物群や土坑等ならびに弥生時代以降の遺物を含む溝状遺構等が分布し、最も年代の新しい遺物には近世陶磁器や寛永通宝がみられた(宮崎県埋蔵文化財センター2005a)。火打石の年代を絞り込むのは難しいものの、石材が他遺跡と共通した玉髓である点は年代を推す根拠とできよう。湯牟田遺跡(第一次)(図2-30)では、B区I層から玉髓製火打石1点が確認された(図4-27)。火打石は、法量 $1.4 \times 1.0 \times 0.8\text{cm}$ ・重量0.9gである。同遺跡B区について、I層は耕作土であり、その下位のアカホヤ火山灰上面で近代磁器片を伴う道路状遺構1条が確認されていることから(宮崎県埋蔵文化財センター2005b)、火打石もまた近代以降の可能性がある。八幡第2遺跡(図2-23)では、確認調査トレンチ8(A-1区)の表土中から火打石1点が確認された(図4-28)。火打石は灰白色チャート製で、法量 $4.0 \times 4.3 \times 3.2\text{cm}$ ・重量62.3gである。よく転磨された円礫の一端を輪切りするように打ち割られ、礫面・剥離面間の稜線に潰れがみられる。A-1区では、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の竪穴住居および時期不明の溝状遺構等が分布している(宮崎県埋蔵文化財センター2007)。

②の火打石の実測図・法量等の情報は、今回が初出である(図4-29～39)。赤石遺跡(図2-25)では、包含層中から近世のものが出土したと報告され(宮崎県埋蔵文化財センター2009)、法量 $1.7 \times 1.1 \times 1.0\text{cm}$ ・重量1.3gの玉髓製火打石の欠片1点である(図4-29)⁴⁾。青木遺跡(図2-32)では、近世以降のものが遺構に伴わず出土したと報告され(宮崎県埋蔵文化財センター2019)、法量 $2.5 \times 2.7 \times 1.8\text{cm}$ ・重量12.1gの玉髓製火打石1点である(図4-32)。東光寺遺跡(図2-36)では、包含層出土の“火打石の可能性のある石英”2点の写真が掲載され(宮崎県埋蔵文化財センター2011a)、図4-30が白色の石英製で法量 $2.1 \times 1.4 \times 1.4\text{cm}$ ・重量3.4gである。図4-31がやや黄みを帯びた白色のチャート製で法量 $2.8 \times 2.2 \times 1.7\text{cm}$ ・重量14.0gである。図4-31は転磨された礫面が残っている。古代から中世まで年代幅を持った包含層出土であることから、火打石の年代の絞り込みは難しい。富吉前田遺跡(図2-83)では古

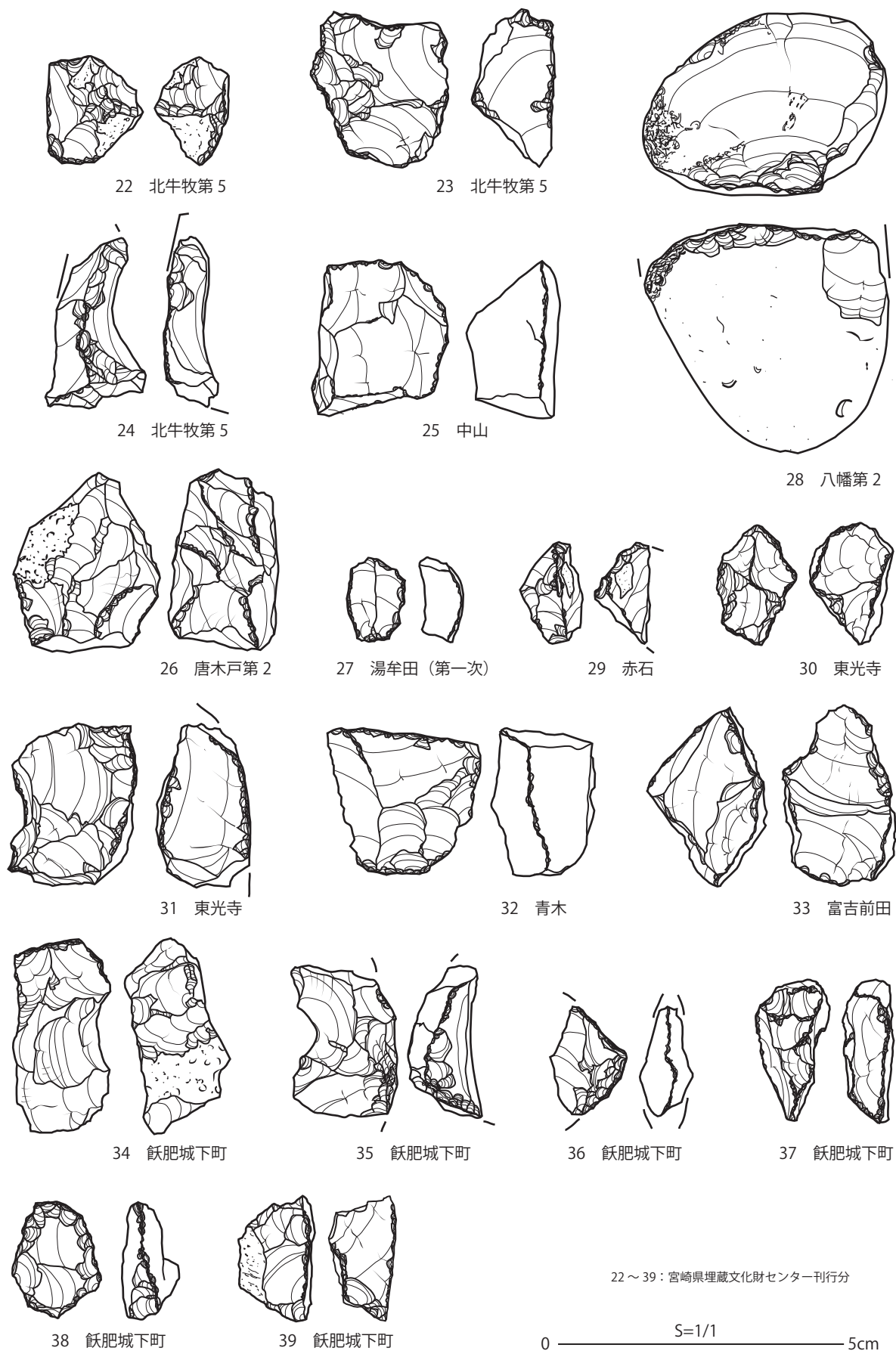


図 4 火打石実測図（2）

代から中世の包含層から火打石1点が出土した旨の本文と写真掲載があり（宮崎県埋蔵文化財センター 2011b）、白色の石英製で法量 $3.1 \times 2.1 \times 2.0\text{cm}$ ・重量 11.5g である（図 4-33）。**飢肥城下町遺跡**（図 2-96）では写真が掲載されており（宮崎県埋蔵文化財センター 2012）、その内訳は大田井産チャート製火打石3点（図 4-35・36・39、このほか図化していない火打石の欠片1点がある）、玉髓製火打石1点（図 4-34、このほか図化していない火打石の欠片1点がある）、乳白色のチャート製火打石1点（図 4-38）、石英製火打石1点（図 4-37）である。出土位置とその年代に注目すると、大田井産チャート製の図 4-36 は 19 世紀前半を中心に 19 世紀後半までの廃棄土坑 S125、同石材の図 4-39 は近代の整地土層Ⅲ層、未図化1点も近代のⅢ層出土である。玉髓製のうち未図化の火打石の欠片は池1の一部を掘り込んだ S40 出土で 18 世紀後半以降になる。石英製の図 4-37 は近代のⅢ層出土である。図 4-34 は S186、図 4-35 は攪乱、図 4-38 は暗渠3層からそれぞれ出土しており、時期の絞り込みが難しい。法量は、図 4-34 : $3.4 \times 1.7 \times 1.9\text{ cm}$ ・重量 10.2 g、図 4-35 : $2.6 \times 1.9 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 5.6 g、図 4-36 : $2.6 \times 1.9 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 1.7 g、図 4-37 : $2.4 \times 1.3 \times 0.9\text{ cm}$ ・重量 3.0 g、図 4-38 : $2.0 \times 1.5 \times 1.0\text{ cm}$ ・重量 2.9 g、図 4-39 : $2.2 \times 1.4 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 3.6g である。

③の小林市教育委員会所蔵資料の検索は、近世において薩摩藩領である小林市域における火打石関係資料の空白域を埋める目的で実施し、火打石8点が確認された（図 5-40～47）。**梅木原遺跡**（図 2-75）では、3区包含層から玉髓製火打石1点が確認され、法量 $2.8 \times 1.7 \times 1.8\text{ cm}$ ・重量 8.6g である（図 5-40）。3区からは縄文土器、煙管や近代銭貨の出土があり（小林市教育委員会 2000）、遺物の様相からみて火打石は近世以降の可能性があろう。**年神遺跡**（図 2-77）では、3区から火打石2点が確認された（図 5-41・42）。図 5-41 は白色チャート製で、法量 $2.3 \times 1.7 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 6.6g である。図 5-42 はやや粗質でうすい灰緑色チャート製で、法量 $1.8 \times 1.3 \times 1.0\text{ cm}$ ・重量 3.0g である。年神遺跡からは縄文時代～近世の遺物が出土し、3区はとくに中世の竪穴状遺構・柱穴群とともに、土師器・陶磁器・石鍋片等も多数出土している（小林市教育委員会 2001）。遺構・遺物の様相からみて、火打石も中世のものと考えておきたい。**大部遺跡**（図 2-76）では、1-4区で3点の火打石が確認された（図 5-43～45）。図 5-43 は半透明灰黒色のチャート製で、法量 $2.2 \times 1.9 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 4.9 g、図 5-44 は半透明白色のチャート製で、法量 $1.3 \times 1.3 \times 0.8\text{ cm}$ ・重量 1.4 g、図 5-45 は灰白色チャート製で、法量 $2.0 \times 2.0 \times 0.8\text{ cm}$ ・重量 3.7g である。1-4区では中世のものと推定されている竪穴状遺構1基と散漫な柱穴群とともに縄文時代から中世の遺物出土が確認されており（小林市教育委員会 2001）、火打石も同じく中世のものとみておく。**広庭遺跡**（図 2-78）では、1区から1点（図 5-46）、4区から1点（図 5-47）の計2点の火打石が確認された。図 5-46 は灰白色チャート製で、法量 $1.9 \times 1.7 \times 1.3\text{ cm}$ ・重量 7.8g である。図 5-47 はサーモンピンク色の珪質岩製で、法量 $1.6 \times 1.6 \times 1.1\text{ cm}$ ・重量 3.0g である。1区では少量の近世陶磁器、4区では溝状遺構や柱穴群とともに一定量の 18 世紀中頃～19 世紀の陶磁器等が出土しており（小林市教育委員会 2003）、火打石もこれに伴うものとみられる。

④は、新富町教育委員会による遺跡詳細分布調査により採集された資料を検索したものであり、火打石3点が確認された（図 5-48～50）。**溜水第2遺跡**（図 2-42）は旧石器時代の遺跡として知られ、法量 $2.4 \times 1.5 \times 0.9\text{ cm}$ ・重量 3.5 g のチャート製（大田井産チャートの可能性もある）火打石1点が採集されている（図 5-48）。**上日置遺跡**（図 2-44）は旧石器時代から近世の遺跡であり、法量 $1.6 \times 1.3 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 2.7 g の玉髓製火打石1点がある（図 5-49）。残る1点（図 5-50）は地点不明ながら**新富町内**で採集された火打石であり、大田井産チャート製

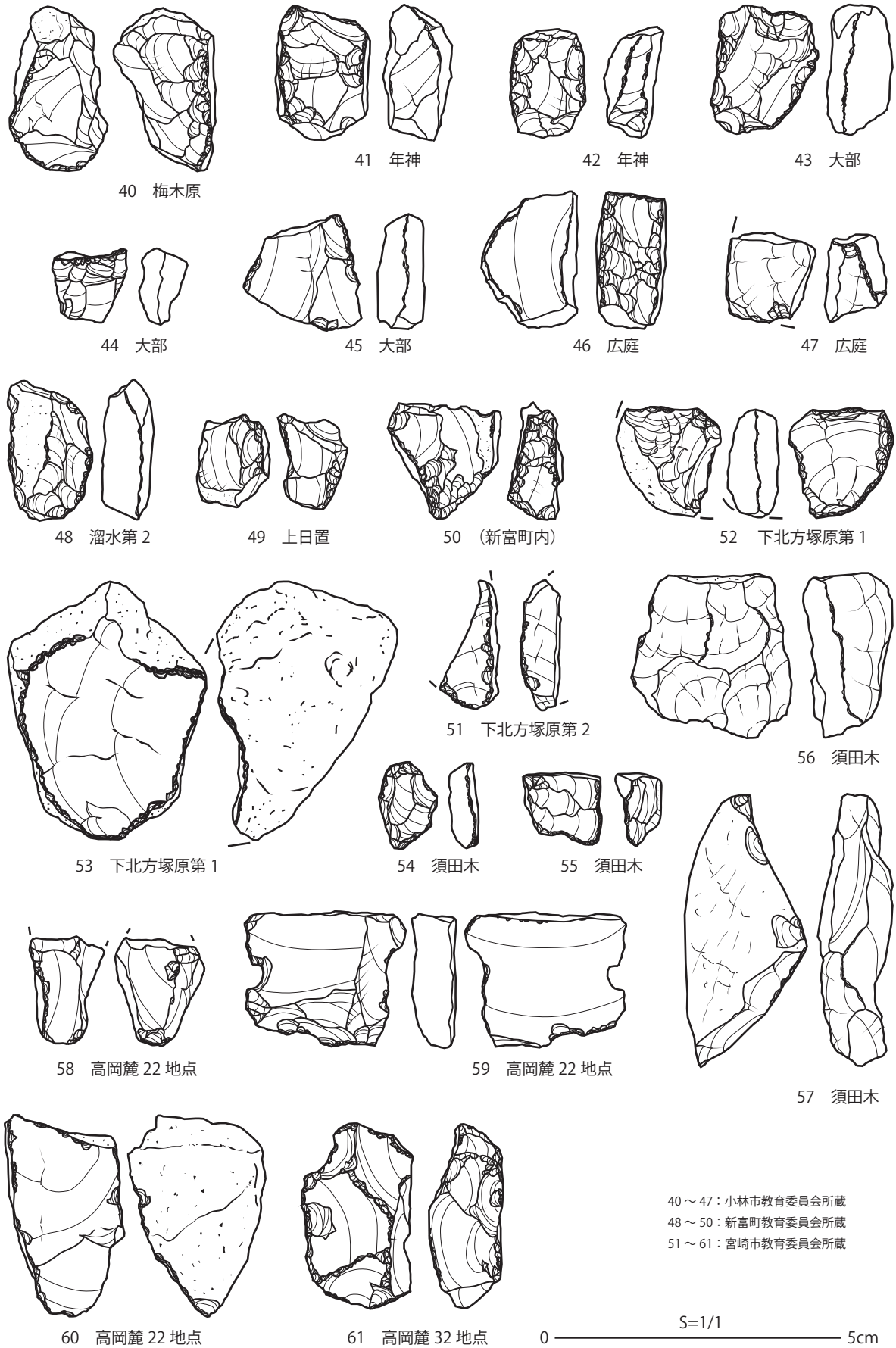


図5 火打石実測図（3）

で法量 $2.0 \times 2.0 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 3.6g である。なお、近世において、溜水第2遺跡は佐土原藩、上日置遺跡は高鍋藩に属する。

⑤の宮崎市（旧清武町・旧高岡町を含む）教育委員会が所蔵されている資料については、下北方遺跡群および須田木遺跡で古代以降の、下鶴遺跡で中世以降の、高岡麓遺跡で近世以降の資料発見を念頭に未掲載石器を検索したものであり、火打石 11 点が確認された（図 5-51 ～ 61）。下北方遺跡群では、**下北方塚原第1遺跡**（図 2-58）Ⅰ区の 13 号ピットから 1 点（図 5-52）、攪乱 B から 1 点（図 5-53）の火打石が確認された。13 号ピット出土火打石は、節理等も多く石質のあまりよくない不透明で黒みの強い灰白色チャート製であり、法量 $2.3 \times 1.8 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 3.1g である。円礫を分割した剥片を火打石として利用している。攪乱 B 出土品は白色不透明の石英製で、法量 $1.9 \times 3.5 \times 3.2\text{cm}$ ・重量 47.4g である。石質は晶洞が目立っておりあまりよくなく、礫面もいびつである。その一端を割って生じた剥離面と礫面との境の稜線に潰れがある。同遺跡Ⅰ区の遺構分布はピットが散漫に広がるもので、遺物も少量小片で遺構の時期特定が難しいとされている（宮崎市教育委員会 2010）。隣接するⅡ区や周辺遺跡の状況からは、古代～中世に収まる火打石の可能性が考えられる。**下北方塚原第2遺跡**（図 2-59）は、古代寺院に伴うとみられる瓦葺の大型掘立柱建物跡をはじめ、9 世紀後半までに収まる 1 号溝状遺構等が確認されている（宮崎市教育委員会 2011）。この 1 号溝状遺構の下層から火打石の欠片 1 点が確認され、遺構年代のとおりに 9 世紀後半までに収まるものとみられる（図 5-51）。火打石の欠片は、節理等の多い粗質かつ不透明で灰～黒みの強い灰白色チャート製で、法量 $1.5 \times 1.1 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 1.8g である。**須田木遺跡**（図 2-68）は、飢肥藩士の調練場と伝えられる場所であり、縄文～弥生時代・9 世紀後半等の古代の遺構・遺物等が報告され、近世以降と思われる鉛製弾丸も出土したという（清武町教育委員会 2004）。火打石は包含層出土の 4 点が確認され、玉髓製が 3 点（図 5-54・55・57）、石英製が 1 点（図 5-56）となる。法量は、図 5-54： $4.8 \times 1.0 \times 0.5\text{cm}$ ・重量 0.8g 、図 5-55： $1.5 \times 1.5 \times 0.8\text{cm}$ ・重量 1.6g 、図 5-56： $1.3 \times 2.8 \times 1.6\text{cm}$ ・重量 13.8g 、図 5-57： $2.4 \times 2.1 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 12.3g である。**高岡麓遺跡**（図 2-73）は、薩摩藩による外城制度により設置された高岡麓の範囲に相当する（高岡町教育委員会 1996）。これまでに高岡麓遺跡 28 地点で 1 点の火打石の出土が報告されているが、8・12・22・25・28・31・32・33・37 地点（高岡町教育委員会 1997・2005、宮崎市教育委員会 2006・2012・2013a・2015、※宮崎県埋蔵文化財センター調査分の図 3-8 は 5 地点に相当）の未掲載資料を検索した結果、新たに高岡麓遺跡 32 地点（宮崎市教育委員会 2012）で攪乱出土の火打石 1 点を確認した（図 5-61）。火打石は灰黒色で良質のチャート製で、法量 $3.3 \times 2.0 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 9.3g である。また、高岡麓遺跡 22 地点（未報告）では、7 号土坑から 2 点（図 5-58・60）、5 号攪乱から 1 点（図 5-59）の計 3 点の火打石が出土していると確認された。図 5-58 は節理の著しい粗質で緑色がかかった乳白色のチャート製で、法量 $1.5 \times 2.1 \times 2.4\text{cm}$ ・重量 18.4g である。図 5-59 は玉髓製で、法量 $1.9 \times 2.8 \times 0.8\text{cm}$ ・重量 6.0g である。図 5-60 は粗質で透光性がなく部分的に赤色の縞が入るメノウ製で、法量 $3.5 \times 1.3 \times 1.6\text{cm}$ ・重量 3.2g である。同地点は高岡町教育委員会で調査され、現在、宮崎市高岡福祉保健センター穆園館の敷地となっている。高岡麓遺跡 22・32 地点の火打石 4 点の年代は、遺跡の性格からして、いずれも近世以降のものであろう。なお、下北方下郷第4遺跡（宮崎市教育委員会 2009）及び下鶴遺跡（宮崎市教育委員会 2013b）では、火打石の出土は確認されなかった。

		粗質のチャート・ 粗質のメノウ・ 石英	良質のチャート (産地不明)	良質のチャート (大田井産)	玉髄	白色の珪質岩
古 代	下北方塚原第2遺跡 ～9世紀後半	 51				
中 世						
近 世	飫肥城下町遺跡 18世紀後半～ 19世紀代	 37	 38	 35  36  39	 34	
	高岡麓遺跡 18世紀後半～ 19世紀代	 58  60	 61		 59	 8
	八幡遺跡 18世紀後半～ 19世紀代			 16		
	上の原第1遺跡 近世末以降				 11	

図6 本報告における遺構出土品からみた火打石の石材の変遷

3 おわりに

冒頭でも述べたとおり、本稿は、宮崎県域から出土した火打石を題材に人と火の関係史を構築するという目標に向けた、基礎資料の蓄積である。成果をまとめると、まず、宮崎県内では、新たに61点の遺跡出土の火打石が追加されることとなり、97か所の遺跡から合計345点の火打石が出土したと集計できる。管見では、宮崎県分345点を含め九州8県で700点強の火打石が知られていることから、九州の遺跡出土火打石の実に半数近くを宮崎県内資料が占めることになった。

2つめには、高千穂町内に稀少な2点目が見いだされことやこれまで資料が皆無であった小林市域の空白も埋めることができたこと、火打石出土遺跡の分布上の偏りが少しずつながらも解消された点がある。

3つめには、時間軸・編年上の観点で、火打石の変遷等を知る上で年代的な定点としうる遺構出土資料を複数抽出できた点である（図6）。まず、9世紀後半までに収まる遺構出土の火打石が下北方塚原第2遺跡で見いだされた点は、おおむね九州一円において8～9世紀代には火打石を用いた発火法や関連する知識が広まっていたという考えを補うとともに、古代日向における発火具の普及や流通等を知る上で重要な成果の1つとして強調される。また、近世段階の遺構出土品に基づく年代的定点として、飫肥城下町遺跡・高岡麓遺跡・八幡遺跡・上の原第1遺跡が挙げられ、18世紀後半～19世紀代における玉髄・大田井産チャートの利用が特徴的である。大田井産チャート製火打石は、現在の徳島県阿南市大田井で産出したもので、船築紀子氏によると、その市場評価の高まりと販売量の増加を受け、18世紀後半以降には、阿波藩の藩政改革の一環としてその採掘・流通・販売に藩の管理が強化され、阿波藩の管理下で大坂の商人（沢屋徳兵衛）

が火打石流通の委託販売を担っており、さらに、19世紀の初頭には、大田井産チャート製火打石は、京都・大阪のほか近国、西国に出荷され、高値で取引されており、品質のうえでも高評価を得ていたという（船築 2010 ほか）。これまでに、小倉・久留米藩の城下町やその周辺、福岡・小倉両藩の境にあたる黒崎宿、長崎奉行所等において大田井産チャート製火打石の出土が確認されており（藤木 2014 ほか）、今回、飢肥藩領ほかでの流通も明確になってきた。玉髓製火打石は、その判別しやすさにより多く見いだされた可能性もあるものの、大田井産チャートと同様に、近世日向において広域に流通したものとみてよからう。今回報告の竹ノ内遺跡・別府原遺跡・祇園原遺跡・北牛牧第5遺跡・唐木戸第2遺跡・湯牟田遺跡（第一次）・梅木原遺跡・須田木遺跡の玉髓製火打石もまた、状況からみて近世以降となる可能性が高い。また、飢肥城下町遺跡や高岡麓遺跡において、粗質チャートや石英等といった地元産石材とともに、広域流通品である玉髓・大田井産チャートがともに用いられた点は、18世紀以降になって大田井産チャート製火打石等の広域流通品が地元産とともに用いられた小倉城下町等の事例（藤木 2020a ほか）とよく一致している。

次回、宮崎県域から出土した火打石からみた、既出資料等と合わせた総体としての評価・位置づけを進めたい。

謝辞

資料の検索、とくに未掲載資料を収めた膨大なコンテナの出し入れやその検索や手続きにおいて、宮崎県埋蔵文化財センターの関係者のほか、次に挙げる機関や皆様には大変お世話になった。文末ではあるが、お名前を挙げて感謝の意を表したい。

小林市教育委員会 新富町教育委員会 宮崎市教育委員会（旧 清武町教育委員会・旧 高岡町教育委員会を含む）

秋成雅博 石村友規 井上誠二 今城正広 金丸武司 河野裕次 桑村壮雄 島田正浩
西嶋剛広 樋渡将太郎 増谷理絵

註

- 1) 火口は”ほくち”と読み、きわめて脆弱な有機質ということもあり、考古資料で見ることほとんどない。日本列島における民俗資料で知られる火口の材料には、ホクチタケ（シロカイメンタケ）・エブリコ・アカタブ（ハルニレ）・ヨモギ・ヤマボクチ類とホクチアザミ・サクラやキリ及びヤナギ等の消炭・イチビやアサ等の殻の消炭・チガヤやガマ及びガガイモ等の穂や綿等がある（深津 1983）。宮崎県内では、椎葉村において、山の枯れ木に生えるシロナバ（別名ホタナバ）をよく乾燥させて燃やし、粉炭にして用いたほか（泉 1980）、高千穂町五ヶ所では、猟師の携行品（猟具の1つとして通常の火口の代用品で着物のタモト等に溜まったゴミ（タモトクソ）を入れていたことや（田中 1971）、高千穂町・五ヶ瀬町では、サルノコシカケ類を乾燥させ、砕いて粉状にしたものが使われたという（黒木 2010）。
- 2) 火打金は、九州全体で79点（藤木 2020b で77点としたが、その後、新例や遺漏分の追加により79点に増加）が知られている。
- 3) 大田井産チャート製火打石については、後章のまとめの中で解説している。
- 4) 報告書では石英製と記載されている。

参考文献

- 泉 房子 1980「火打ち金」『民具再見』鉾脈社、310-311 頁
- 清武町教育委員会 2004『須田木遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第 12 集
- 黒木秀一 2010「宮崎県のきのこ方言と民俗」『宮崎県文化講座研究紀要』第 37 輯、宮崎県立図書館、69-92 頁
- 小林市教育委員会 2000『梅木原遺跡発掘調査報告書』小林市文化財調査報告書第 11 集
- 小林市教育委員会 2001『市谷遺跡群 餅田遺跡・大部遺跡・杉菌遺跡・年神遺跡』小林市文化財調査報告書第 13 集
- 小林市教育委員会 2003『広庭遺跡』小林市埋蔵文化財調査報告書第 16 集
- 西都市教育委員会 2009『日向国分寺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第 56 集
- 新富町教育委員会 2007『新富町の埋蔵文化財（改訂版）』新富町文化財調査報告書第 46 集
- 高岡町教育委員会 1997『高岡麓遺跡第 8 地点』高岡町埋蔵文化財調査報告書第 15 集
- 高岡町教育委員会 2005『高岡麓遺跡 12 地点』高岡町埋蔵文化財調査報告書第 39 集
- 田中茂 1971「第五章 狩猟習俗」『民俗資料緊急調査報告書－高千穂地方の民俗－』宮崎県教育委員会、175-180 頁
- 深津正 1983『燈用植物』ものと人間の文化史 50、法政大学出版局
- 藤木聡 2014「久留米城下町・小倉城下町・黒崎宿の火打石とその特質」『先史学・考古学論究VI』、301-312 頁、龍田考古会
- 藤木聡 2017「古代から近世の日向における火打金とその変遷～鳥居龍蔵の言及と考古・民俗資料の集成～」『宮崎考古』第 27 号、宮崎考古学会、17-26 頁
- 藤木聡 2020a「九州の火打石－研究の到達点と展望－」『江戸遺跡研究』第 7 号（特集 火打石研究の最前線）、江戸遺跡研究会、11-26 頁
- 藤木聡 2020b「九州における火打金の登場と変遷」『遺跡学研究の地平－吉留秀敏氏追悼論文集－』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会、587-596 頁
- 船築紀子 2010「大田井産チャートの流通と大阪近世都市」『財団法人大阪府文化財センター研究調査報告』第 7 集、223-254 頁
- 宮崎県教育委員会 1991『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書Ⅲ』
- 宮崎県教育委員会 1993『吾平原第 2 遺跡・宮ノ前第 2 遺跡・城ノ平遺跡』
- 宮崎県教育委員会 1994『三納代地区遺跡群 城ノ下遺跡 柳原遺跡 志戸平遺跡（二次）』
- 宮崎県教育委員会 1995『学頭遺跡・八兄遺跡』
- 宮崎県教育委員会 1996『高岡麓遺跡』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999『西下本庄遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 15 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000a『上の原第 2 遺跡 上の原第 1 遺跡 上の原第 4 遺跡 白ヶ野第 3 遺跡 A 地区』（第 1 分冊）、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 25 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000b『竹ノ内遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 27 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『内宮田遺跡 柳迫遺跡 中別府遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 30 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 61 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003a『八幡遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 70 集

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003b『祇園原遺跡 春日地区遺跡第2地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第73集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003c『北牛牧第5遺跡 銀座第3A遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第80集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『中山遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第93集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005a『唐木戸第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第100集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005b『湯牟田遺跡 (一次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第107集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『八幡第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第148集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009『住吉B遺跡 赤石遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第184集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011a『東光寺遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第207集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011b『富吉前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第209集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『飢肥城下町遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第220集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2019『青木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第248集
- 宮崎市教育委員会 2006『高岡麓遺跡 (25地点)』宮崎市文化財調査報告書第63集
- 宮崎市教育委員会 2009『下北方下郷第4遺跡』宮崎市文化財調査報告書第74集
- 宮崎市教育委員会 2010『下北方塚原第1遺跡』宮崎市文化財調査報告書第78集
- 宮崎市教育委員会 2011『下北方塚原第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第82集
- 宮崎市教育委員会 2012『高岡麓遺跡第28・31・32地点』宮崎市文化財調査報告書第90集
- 宮崎市教育委員会 2013a『高岡麓遺跡第33地点』宮崎市文化財調査報告書第95集
- 宮崎市教育委員会 2013b『下鶴遺跡』宮崎市文化財調査報告書第101集
- 宮崎市教育委員会 2015『高岡麓遺跡第37地点』宮崎市文化財調査報告書第105集

【 図表出典等 】 図1～6、図版1・2：遺物実測・製図・写真撮影や作図は全て筆者による。